

毎日の授業を中断して、軍需工場に動員されたのは四年生のいつごろであったろうか。初夏だったような気もするし、二学期になってからだったろうか。(今度、一期の会に出た時に確かめたい。)

私はこの工場で働いた時期が今になっても何か懐かしい思い出として記憶している。現在でいえば高一の年齢で、あれほど非日常的な体験はそうできることはないし、いやなことは早々忘れてしまっているもので、特に記憶に残っていることを断片的に一つ二つばかり書いてみたい。

A組が行った常盤台の桐山伸銅所で、私に割り当てられたのは溶鋳炉現場だった。仲間は市川定君、太田豪幸君、川本嘉明君、茂木謙一君、森下一夫君、渡辺卓郎君等。仕事はアルミ、マグネシウム、真鍮など材料を炉で溶かし、鋳型に注ぎ込んで加工用の塊(あのご時世でもインゴットと英語で言われていた)を作ることで、われわれはその補助作業を受け持っていた。

「コーラス」

ある日、休み時間に市川君が「これから毎日みんなで唄を歌おう」と言い出した。軍歌や国民歌ではなく楽しいのを歌うのだという。

彼の家にあるレコードの中から選んで来て、彼が指導するというか、自分で歌うからそれをみんなが覚えて歌えというのだ。「赤き翼を胸につけて」、「狂乱のモンテ・カルロから」マドロスの恋」、「マリネラ」、「ラベルのボレロの旋律での」夕陽さすグラナダ」・・・歌った。みんなすぐ覚えて歌った。そして何と「美しく青きドナウ」までも。

これは一体何だったのだろう。だれも今まで歌のことなど話題にもならなかったし、まして歌唱力の有りそうな者もいなかった。更に言えば、聴く人が聞けば、こんなの「歌」の中に入らないと眉をひそめるようなものだったに違いない。それでも歌っていたのは、当時われわれの興味の対象となるものが、いかに何もなかったかということなのかもしれない。

「煙突」

溶鉱炉の煙突は、棟の入口の前に地面から生えたように立っていた。直径一呎位でコの字型の手摺り・足場用の鉄棒が、約五十呎の間隔で埋め込まれていた。だれでも時々遊び感覚で数段登る程度のことがあった。ある時、工員の人たちと話していて、だれかこのてっぺんまで登った人はいるか、と聞くと「そんなことする奴はいない」と言う。私たちは、それならわれわれで一番乗りをやってみようということになり、どういう訳か私が挑戦することになった。

強制されたのでもなく、体操は何をやってもレベル以下だったが、煙突にただ登るには技術もいらないし特別な体力も要求されないから、だれでもできると思ったからだ。こういうことでもなければ、大勢の前で目立つチャンスはそうそうないという気もあった。

みんなの目の前で登り始めた。下を見ないでどんどん登って行った。怖さはまったくなく。ところが、てっぺんから四〜五段目あたりで気がついたのは、こちら辺まで来ると、手摺りも煙突の周囲も、煤と油煙で真っ黒になっていた。煙は上の穴からまっすぐ上空に出ると思いついていたのは間違いだった。でも仕方がない。とにかくその四〜五段を昇りつめ、地上に降り切った。手も作業服の前面も黒く汚れて。

数日後、もう一人の仲間と、また昇る機会があった。二人とも無事にやり遂げた。見ていた工員たちが「やっぱり学生さんは違うな」と褒めそやした。何が違うんだか・・・。その日の中に工場から、今後煙突に登るなど、通達があった。実は内心ほっとした。だんだん登るのが怖くなってきていたから。

「徹夜勤務」

二月になって、この工場でも一時的な増産体制が要求された。昼間の作業だけでは追い付かない。このころは、職長は徴用工として満州に連れて行かれ、炉の番だけならともかく、昼も夜もの作業をするにはもつと手がいる。ということであれわれに御鉢が回ってきた。

ずーとではない。一週間だけ。(大体、連日夜間作業するほど大量の材料は入ってきていなかった。)われわれも二手に分かれ三、四人ずつその期間だけ昼、夜で働いた。私は初めの班で、初日は何か緊張した気分で出かけたのを覚えている。担任の了解を得てコートを着てきたのも普段と違っている。駅で出会った仲間と一緒に工場に向かっていると、たまたま隣の組の担任に出会った。「何だその恰好は」と言うので、事

情を説明すると、大変だな御苦労さんぐらい言うと思っただが、「もっと中学生らしい服装をしろ。そんなだらしない格好じゃ、高等学校や大学の入試は通らんぞ。」
たしかに兄貴の高校のマントや親父の古いコートを借りて着ていたので、奇異に見えたのだろうが、今の衣料事情で何を考えていたんだろう。きっと先生も教壇の上から怒鳴る機会も減多になくなったので、何か言ってみたかったのかも知れない。

工場に着いた。とにかく寒い。炉の前での手作業を言いつけられたので、やれやれと思つて仕事をしていると、顔の方が火傷するくらい熱くなってくる。背中の方はゾクゾクするほど寒い。後ろを向いて仕事するわけにもいかない。我慢できないくらいの熱さと寒さを一遍に体験したのは後にも先にもこの時だけだ。

仕事が一段落したころ、風呂に入ろうかという話になった。夜なのでボイラーは炊けない。どうやって風呂を沸かすかと言うと、水を張った浴槽に、型から出したばかりのインゴットを四、五枚ぶち込み、あつという間に良い湯になる。ただこれはわれわれではできない。一から十まで工員のお世話にならなければならない。われわれだけ一人としてインゴットを扱えない。三十kg以上の金属を鉄の鉋でひよいと摘まんで、自分の頭より高い所にきちんと並ぶように放り投げて行く技は、一朝一夕には身に着かないだろう。ということ、夜目にはまだほの赤く見えるような、できたてのインゴットを風呂場に運んで浴槽にぶち込み、終わったら取り出して所定の場所に積み上げておいてもらう。申し訳ないようだが、この入浴の裏技も彼らから教わったことで、お互いに持ちつ持たれつなのだ。

そんなこんなで、夜勤は終わったが、それから1カ月もしない中に、夜中の空襲で東京は大被害を受けた。夜勤の間に何もなくて良かった。

卒業後もまだみんなここで働いていたが、毎日のように一人また一人「明日入学式ですのぞ」と去って行った。私も7月になって残っていた友達に別れを告げてここを去った。

近況

現役を引退してちょうど10年。地域や学校などでボランティア活動を、とも考えますが、なかなか参加に踏み切れず、今のところ午前はウォーキング（ただの散歩）、午後は専ら読書の繰り返しです。数独は好きです。